

【旧約聖書日課】イザヤ書 8章23節b~9章3節

8^{23b}先に

ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが
後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた
異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

9¹闇の中を歩む民は、大いなる光を見

死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

2 あなたは深い喜びと

大きな楽しみをお与えになり

人々は御前に喜び祝った。

刈り入れの時を祝うように

戦利品を分け合って楽しむように。

3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を

あなたはミディアンの日のように

折ってくださった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 1章8~17節

8まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの
神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9
わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証し
してくださることで、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思
い起こし、10何かしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける
機会があるように、願っています。11あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜
物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。12あなたがたのところで、
あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。
13兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたが
たのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、
今日まで妨げられているのです。14わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知
恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15それで、ローマにい
るあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、
信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17福音には、神の義が啓示
されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。
「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

【福音書日課】 マタイによる福音書 4章12～17節

¹²イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。¹³そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。¹⁴それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

¹⁵「ゼブルンの地とナフタリの地、
湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、
異邦人のガリラヤ、

¹⁶暗闇に住む民は大きな光を見、
死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

¹⁷そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

「天の国は近づいた」【こども説教のために】

最初の弟子になった四人の漁師が主イエスから呼びかけられたのは、ガリラヤ湖の畔でのことでした。四人のうちペトロとアンデレの家は、ガリラヤ湖の北端、カファルナウムという町にあったと言われていますから、きっとその町の湖畔でのことだったのでしょう。そこで仕事をしていた漁師たちのところに、主イエスはいつの間にか近づいて来られたのです。

漁師たちを弟子として招かれたとき、主イエスは、お一人だったようです。一人で、この地方を巡って、人々に訴えていらっしやいました。「悔い改めよ。天の国は近づいた」と。

主イエスが人々にお告げになった言葉は、洗礼者ヨハネにそっくりでした。ユダヤ地方で人々に教え、ヨルダン川で洗礼を授けていたヨハネです。主イエスも、ヨハネから洗礼をお受けになられていました。ヨハネが「悔い改めよ。天の国は近づいた」(3:2)と告げたとき、人々はこぞってヨハネのところにやって来ました。ところが、主イエスがお告げになられても、同じように人々はやって来ません。そこで、主イエスは、ご自分から出かけて行かれたのでしょう。日々働き、生活し、楽しみ、また悲しんでいる人々のただ中に、主イエスをご自分から近づいて行かれたのです。「天の国は近づいた」と。

その主イエスから弟子たちがお教えたいただいた「主の祈り」の中に、「**み国が来ますように**」(共通口語訳)という一句があります。「天の国(神の国)が来ますように」という祈りです。わたしたちは、神の御心になつた「天の国(神の国)」が完成するのを待ち望んでいます。神が実現してくださることを期待しています。でも、主イエスは、「天の国は、すでに近づいている」とおっしゃいました。主イエスが人々に近づいて来られたように、主イエスの「天の国」は、もうすでに、わたしたちの近くまで来ているのです。

ガリラヤへ

石神井教会は、「日本基督教団」という合同教会に所属していますが、その中の地域的な組織である「東京教区北支区」という単位の中で、諸教会と日常的な活動を共にしています。先々週の「成人の日」には、この「北支区」の新年礼拝にも、何人かの皆さんと参加してきました。

わたしが石神井教会に牧師として着任したのは9年前の春ですが、元々、北支区内の目白教会で生まれ育ちました。神学校に進んでからは、同じ東京教区の南支区の教会で二年、さらに神奈川教区の教会で一年、出席奉仕の経験を重ねさせていただいた後、卒業後に最初に赴任したのは、遠く九州教区（大分地区）の教会でした。25年前のことです。当時、海外や沖縄、北海道には行ったことがありましたが、九州は足を踏み入れたことがなく、まったく未知の土地に行くことになったのです。着任早々、商店街でも「東京から来た牧師さん」と知られていましたが、最初から、「東京から来た者は、すぐに東京に帰る」と言われていました。実際、四年後に神奈川教区の教会に転任になったときには、「先生は東京の教会へ行く」と言って送り出されました。その神奈川教区の教会に12年お仕えして、再び北支区にある教会に戻ってきたのが、9年前のことです。出て行った経路を逆に辿って戻って来た形になりました。主イエスは、弟子たちと共に故郷ナザレにお帰りになられたとき、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」（13:57）とおっしゃられました。その言葉を肝に銘じながら、自分が生まれ育った教会のある北支区で牧師として仕えることの意味を考えさせられています。

主イエスは、ガリラヤ地方のナザレという町を故郷とされていました。降誕物語ではユダヤ地方のベツレヘムでお生まれと伝えられる主イエスですが、両親はナザレに住んでいたのです。少しばかり奇特な少年としてお育ちだったようですが、その地で平凡な日常の中、成人されました。そして、三十歳になられる頃、ユダヤの荒れ野で活動する洗礼者ヨハネのもとに出て行かれ、彼から洗礼をお受けになられたのです。

主イエスは、ユダヤ地方でヨハネと共に宣教活動をするおつもりだったのかもしれませんが。ところが、ヨハネは、ガリラヤの領主ヘロデに捕らえられてしまいます。ヨハネがヘロデの私生活を批判したためでした（14:3~5）。ヨハネが捕らえられてガリラヤの地に幽閉されたとき、彼の弟子たちも伴って行ったのでしょう。そして、主イエスもその中にいらしたようです。それは、主イエスご自身の計画とは異なることだったかもしれませんが。けれども、主イエスは、故郷ナザレのあるガリラヤ地方の主要都市、カファルナウムを拠点とされることになったのです。たとえ「故郷で敬われない」ことがあるとしても、そう導かれて来たことを、神の御心と信じられたのでしょう。

妨げられても

主イエスは、ご生涯の最後の一週間を、ユダヤの都エルサレムで過ごされ、その地で十字架につけられました。「福音書」は、主イエスが常にエルサレムを目指されていたことを伝えています。それは、もしかすると、最初に洗礼者ヨハネのところに行かれたときからのお考えだったのかもしれませんが、ところが、ご自分が行動を共にしようとお考えになられたヨハネが、思いがけず捕えられガリラヤへと連れて行かれたとき、主イエスは、一人ユダヤ地方に留まり、エルサレムを目指すということを選ばれませんでした。エルサレム行きが妨げられても、ガリラヤに行かれることを選ばれたのです。

異邦人の使徒と呼ばれたパウロは、シリア・アンティオキアの教会からバルナバをリーダーとする宣教団の一員として派遣された後、マケドニア、アカイア、アジアと呼ばれる地域、エーゲ海を挟んだ地を中心に活動しましたが、あるときからローマの教会を訪問することを望むようになったのです。アジア州エフェソを拠点とした活動に行き詰まっていたので、大使徒ペトロの指導するローマの教会に行き、事態を打開し、新たな展開を切り拓こうとしていたのかもしれませんが、けれども、そうすることができない事情が重なり、なかなかローマに行くことができなかったのです。

パウロには、新しい計画がありました。ローマに行ったら、そこからさらに西方の彼方、スペインに送り出してもらって、そこで宣教活動をしように考えていたのです。彼にしてみれば、壮大な計画だったに違いありません。そのために、ローマの教会の人々の協力を取り付けようと考えていました。実際に訪問して、そこで顔を合わせてから伝えるのでは遅いと思い、パウロは、書簡にその計画を記し、あらかじめ伝えることにしたのです（ローマ 15章）。これまでは、妨げがあつて行くことができずにいたけれども、必ず行って直接会い、考えていることを話し、思いを分かち合い、神の恵みに共に預かる者として受け入れてもらえるようになりたい。そう願うパウロの思いが、この手紙に込められています。残念ながら、教会伝承によると、パウロはローマの地で殉教し、スペイン伝道の計画は実現しなかったのです。

エルサレムを目指された主イエス。ローマを目指したパウロ。それぞれに計画があり、目指すものがありました。それを妨げるものが生じたとき、主イエスもパウロも、敢えてその妨げの中に留まり、そこで為すべきことを果たすことにしたのでしょう。この地でも、あの地でも、神が御心とされていることは一つだからです。この人たちにも、あの人たちにも、「天の国（神の国）の福音」を告げることです。この人たちにも、あの人たちにも、自ら近づいていくことです。彼らが振り向くまで、その背後からお呼びになられる神の御声に気づくようになるまで、この人に、あの人に一歩近づくことです。